2016.8.23　大草

読書メモ

10.和辻哲郎　「人間の学としての倫理学」（岩波文庫）

11.友松圓諦　　「仏陀のおしえ」（講談社）

12. 友松圓諦　　「空海の人間学」（竹井出版）

13.島園進　　　「国家神道と日本人」(岩波新書)

14.末木文美土　「日本宗教史」（岩波新書）

15.島田裕巳　　「浄土真宗はなぜ日本でいちばん多いのか」（幻冬舎新書）

16.大角修　　　「お経の心」（東京美術）

17.金岡秀友　　「現代人の仏教」（人文書院）

18.ひろさちや　「すらすら読める正法眼蔵」（講談社）

19.山折哲雄　　「こころの作法」（中公新書）

20.森末伸行　　「ビジネスの法哲学」（昭和堂）

「日本文化を読みなおす」（大隈和雄）より。

Ｔも輪廻の中にあり、仏教の理法の中にあると考えうる。Ｔも仏教の理法に従い地獄に落ちるとしたら、地上でそのＴを救う方法は仏教にしかないだろう。

眼に見えない世界とこの世の関係について。

①人は生涯を終ると、眼に見えない世界に行くと考えられるが、眼に見えない世界に行った人間の霊はしばしばこの世に戻る。しかし、その往復は年月が経つと希薄になりやがて消る。

②眼に見えない世界に行った人間の霊は、特段の事がない限り、その世界に鎮まっている。霊はこの世の他の生き物になることはない。また、この霊は、女性の胎内に宿り、二度三度とこの世に産れることはないと考えられている。

③眼に見えない世界には、神や仏・菩薩が既にいる。普通の人の霊は簡単に神や仏になることはない。

人の霊は、神や仏と別ものと考えられる。

④眼に見ない世界に存在するものは、この世の人間に対し託宣をつたｅたり、この世に出て来ることがあると考えられている。神や仏・菩薩が人間の姿をとりこの世に現れる場合、何らかの予兆を行って人間の女性の胎内に宿るが、特に人間の側からの働きかけが強いと申し子という形をとる場合がある。そうしたものは、この世に出てくる目的を達すると元の姿にかえる。

⑤仏教が広まると、仏の国に生れることを願う人々が多くなり、人間の霊も神仏に近いものとなると考えられるようになり、死後の世界について様々な教えが説かれるようになった。

⇒因果と輪廻の思想は極めて難しいものだったが、その思想は日本人の世界観や宗教意識に大きな影響を与えた。

以上